

教職大学院開設3年目、授業公開もさらに充実！

平成29年度は教職大学院の開設3年目にあたります。4月17日(月)～28日(金)の2週間にわたり、授業が公開されました。本学教育学部生をはじめ、私立大学生、現職の先生方、県教育委員会の先生方など、さまざまなお立場の皆様(延べ30名)にお越しいただきました。年度初めのお忙しい中、ご参観いただきまして、ありがとうございました。

◆受講生の学びを見ていただきました

参観者から多数の感想をいただきましたので、抜粋して紹介します。紹介しきれなかった皆様も含めまして、誠にありがとうございました。

- 課題を共有したり、意見を交流させたりする授業に魅力を感じました。特に現職の先生方と共に学べるのは素晴らしいと思います。このような意味のある学び合いを繰り返すことで、教師として必要とされる様々な力を育むことができるのだと思いました。(学部3年生)
- 今までの授業では、話をひたすら聞くものがほとんどであったため、グループで話し合う授業、かなり長い時間話し合っていたのが印象的でした。(学部4年生)
- どの講義も現場での実践に基づいた(もしくは現場での教育の背景を想起させる)、高度で実のある内容でした。他の先生方との対話により自分の視野が広がり、考えがどんどん深まっていくのを感じました。(中学校教諭、宇大へ内地留学中)
- 教職大学院で質の高い豊かな学びを積み重ねていることがよくわかりました。こういった授業をたくさん受けることのできる皆さんを羨ましく思います。教師としての力量を更に高め、学校現場に大いに還元して欲しいと願っています。(県教育委員会事務局職員)
- 現職派遣院生は、これまでの教職経験をもとに、学卒院生は、大学での4年間の学びをもとに、協働的な学びを通して、課題に対して積極的に取り組んでいる姿勢に感銘しました。研究者教員と実務家教員のそれぞれの強みを生かし、チームとして連携しながら授業づくりを行っている取組にも、教職大学院らしさを感じました。(県教育委員会事務局職員)



◆「なぜこの時期に授業公開？」へお答えします

授業を公開するのは、本専攻についての理解を深めていただきたいと願っているからです。現職教員として大学

院派遣を希望する前に、本専攻の様子を直接見ていただければ、大学院での学習のイメージが確かなものになります。ストレートで進学を目指す学部生にとっても、他専攻と類似するところや異なるところを知る上で、授業参観はよい機会です。



授業公開週間を4月下旬に位置付けている理由は、二つあります。第一に、多くの授業を参観いただきたいからです。本専攻の授業は、前期と後期に均等に開講されてはいません。全体の2/3が前期に、1/3が後期に位置付けられています。後期になると、大学院生(1～2年生の全員)は連携協力実習校へ出向き、さまざまな実践を通して学習を進めます。実習校へ出向く時間(曜日)を確保するために、後期の授業を少なくせざるを得ないという事情があります。第二の理由は、授業の序盤を見学していただきたいからです。授業の開講から2～3週目にあたるこの時期に、担当教員は授業のねらいやゴールを示して、受講生が授業のアウトラインをしっかりと理解できるように努めます。授業の中盤以降では各論に入り、ねらいやゴールが述べられることは少なくなります。参観者にも、授業のアウトラインと特徴をつかんでいただきたく、この時期に公開しています。

◆専攻説明会へもお越しください

宇都宮大学の秋季オープンキャンパスが、例年11月に実施されます。これは、おもに高校生を対象に、授業見学を通して大学での学習や生活にふれていただく機会です。教職大学院も、秋季オープンキャンパスに合わせて、専攻の概要についての説明会を開催しています。本年も平成29年11月3日(金・祝)に予定しています。こちらへもぜひお越しください。

(文責:人見久城)



「経験主義」

教育実践高度化専攻教授 青柳 宏

「経験主義」に立つ教育論は、かつて、「自由放任の教育論」あるいは「知識の教授を軽視する教育論」として捉えられてしまったように思われます。しかし、これは、「経験主義」に対する完全な誤解です。経験主義に立つ教育論が何より重視するのは子ども（生徒）の生活経験です。子ども（生徒）が、自らの生活の中で、何を体験し、その結果として何を感じ、何を思い、何に疑問を感じ、時には何に腹を立てているのか。子ども（生徒）は、生活する中で何かを経験することを通して、何かを切実に思い、自ら何かを解決しようとする人格的な存在である。経験主義の教育論の核心は、何より、子ども（生徒）をこのような人格として捉えることにあり、と捉えられます。

このように子ども（生徒）を人格として捉える、ということと、例えば「知識を教授する」ということは矛盾しません。ただ、そこで問われているのは、ある知識を子どもに教えることが、子ども自身の人格的な要求（例えば、生活の中で見出した問題をもっと深く考えたいという要求）にマッチしているか、ということです。もし、子ども自身の人格的な要求と、知識の教授がマッチしていれば、子どもは生活経験に発しているその問題意識を深めていくことが出来ます。このことが、著名な経験主義の哲学者であるジョン・デューイが強く主張した「経験の再構成」ということです。

ただ、子ども（生徒）は、生活の中でそんな切実な疑問を果たして持っているのか、と疑う人もいるかもしれません。しかし、この「疑い」は一端保留して、教師（大人）が子ども（生徒）に真に向き合った時、子ども（生徒）たちは、何かを語り始めるのではないのでしょうか。

《シリーズ:教職大学院授業紹介② 「特別支援教育の実践と課題」(共通科目[前期])》

H.G.ウェルズによって書かれた『盲人国』という話があります。盲人の国にやって来た「目が見える」主人公は、「目が見えない」人たちにとって暮らしやすいようにつくられた国ではうまく生活ができず、ついには「眼とよばれる例の奇妙なもの」があるからいけないのだと言われてしまいます。

実は、周囲の環境やそこで使える「道具」、人びとの意識によって、ある個人の「できること」や「能力」は変わってきます。つまり、課題を誰か一人の問題としてとらえるのではなく、人びとの間に存在するものとしてとらえる視点が重要であるといえます。したがって、特別支援教育について考えるときには、子どもの障害名やその特徴と支援方法について知るだけでは不十分であり、障害のある子どもも含め多様な子どもたちの学びを保障するという視点から、学校や授業のあり方そのものについてとらえ直すことが必要だと考えられます。



この授業ではまず、「障害」とは何か、支援を必要とする子どもたちが抱える困難さを理解することがなぜ難しいのか、日本でのインクルーシブ教育の難しさはどこにあるのか等、特別支援教育をめぐるさまざまな課題について考えます。これは、院生一人ひとりがこれまでの自分の「障害」や「特別支援教育」に対する考え方を振り返るための時間でもあります。その後、学校現場での具体的な事例に触れながら、アセスメントや支援方法、授業づくりや学校の体制づくりについて学んでいきます。事例で示される方法はどこでもうまくいくというわけではありません。それぞれの学校や学級の実態を踏まえて広い視野から支援のあり方について考えていく力をつけることを目指した授業です。

(担当代表：司城紀代美)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。